革命戦記　アルマゲマキナ

木国　多夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
革命戦記　アルマゲマキナ

【Ｎコード】
Ｎ１５０８Ｚ

【作者名】
木国　多夢

【あらすじ】
古の地獄……。

人の悪を育て、その邪な魂を糧とする悪魔。
かつての地獄はそんな悪魔たちの住処だった。

長い、長い間……。

しかし、それを良しとしない「違う」悪魔たちがいた。

彼らは古い悪魔を封印追放した。

そうして理性と秩序の守られる新しい地獄が作られたのだ。

プロローグ（前書き）

この小説は独自の解釈が多く含まれています。
気を付けてください。

原作の設定と多少違うところもあるかもしれません。

誤字脱字は報告してください。
感想よろしくお願いしますw

プロローグ

……もう３００年以上前の話になる。

かつて悪魔はひとつだった。
新しいも古いもなく、ただ人間の負の感情を喰らうだけの存在だった。
しかし、それは清く正しい悪魔の在り方だった。

人間が人間界で邪な感情を育て、冥界では悪魔がその感情を喰らい、天界が人間界に還す。
それは本来の魂が循環する仕組みだった。

しかし悪魔は、人間界で人の悪を育てることでさらなる力を得ようとした。

悪魔に欲が目覚めた瞬間だ。

そうなると未熟な悪魔達は止まることを知らなかった。

やがて人間界、冥界、天界のバランスが崩れはじめ、それは深刻になりつつあった。

……このままではいけない。

そうして立ち上がったのが悪魔の中でも取り分け知性の高い我々、「インテリジェント」という種族。後に新悪魔と呼ばれる種族だった。

インテリジェントは各地でそれぞれに活動し、なおも欲を抑えられない悪魔に立ち向かった。

それがアルマゲマキナとして語られる大革命の始まりだった。

……アルマゲマキナの戦いは何百年もの間続いた。

しかし、インテリジェントはそれほど優勢ではなかった。
インテリジェントは知性は高かったが、他の種族より圧倒的に力と数で劣っていたのだ。
しかもインテリジェントの懸念する魂循環システムの崩壊は、知性の低い他の種族には理解できなかった。

そのこともあって、お互いに理解できない、滅ぼし合うだけの戦いが長く長く続いていた。

プロローグ

「おい、スカール。」

スカールと呼ばれた少年は野原に生い茂った柔らかな草の中から起き上がった。
少年と言っても、彼は悪魔。その容姿は人間とは違いまがまがしい二本の角が立ち、身体全体は紅く染まっている。

「ボク達は何をしているんだろうな？」

そう言う彼は何故か朱い空を見上げている。
いや朱い空の境界線の向こうには人間界がある。
彼があちら側を見ているのだとすぐに分かった。

「人間の魂を喰らって、喰らって喰らって…。その先に何があるんだろうな？」

スカールはとっさにはその哲学的な質問に答えることができなかった。
考えたこともなかったからだ。

「どうしてそんなことを？」
「何かあるのなら、その先を見たいとは思わないか？」

魂を喰らってその先…。

「ボクと一緒に来ないか？」

そう言ってその悪魔は手らしき部位をスカールに差し出した。
スカールにそれを承諾する理由はない。しかし拒否する理由もない。
スカールはその手を取って、立ち上がった。

「なかなか面白そうだ。」

それが英雄スカールと天才フォルテのコンビ結成の瞬間だった。

スカールによる実証もあり、フォルテの研究は順調に進んでいた。

しかし、研究が進むに連れて分かってきたことはとてもいいものではなかった。

今のように人の悪を育てながら魂を循環させると、そのうち循環機構は破滅してしまうことが明確になってきたのだ。

それはとても単純なことで、魂に悪がない状態というのはとても高いエネルギーを持っているということだ。

エントロピーにより天界でもとの状態に戻すことができずに人間界に帰されると人間界の悪はより多くなる。

そして悪魔がさらに人間の悪化を加速させると、魂全体が悪になってしまい、三界共に破滅してしまう。

スカールとフォルテは即座にこの情報を発信したが、この情報を理解できるのは自分たちと同程度の知性を持つインテリジェントだ

けだった。
その他の悪魔たちは聞く耳を持っていなかった。何より自分のことを一番に考えていたからだ。

そして自分たちの行動を制限しようとするインテリジェントを攻撃してきた。

「おいフォルテ。」
「ああ、分かっている。」

何をすべきか。
分かり合えず、敵となるならば戦うしかあるまい。

「なぜボク達は分かり合えないのだろうな？」

スカールはその質問には答えることができた。

「それは自分達の中に彼らが入っていなかったからだ。彼らは本物の悪魔だ。そして俺達は新しい別の悪魔なんだ。」
「結局ボクができることなんてそんなものか。」

フォルテは悔しそうに草を引きちぎって投げ捨てた。
彼にしてみればあの報告はただの警報だったのだ。それが戦争につながるとは思いもしない。

「フォルテ、お前は何も悪くない。」
「スカール、お前はこんなボクにもそう言うんだな。」

スカールはフォルテにその手を差し出した。

「一緒に戦おう。俺達は三界を救わなければならない。」

プロローグ（後書き）

更新はおそらく一週間にいっぺんのスローペース。
長くなりそうなので、途中で力尽きるかもしれませんがなるべく頑張るのでよろしくお願いします！

1－1　作戦会議（前書き）

今回はかなり短め！
というかあんまり上手く書けなかった。

自分の頭が悪いせいで「フォルテは天才」という設定が生かせない
w

1―1　作戦会議

戦争が始まって百年程経った頃の話だ。
我々インテリジェントは絶滅の危機に瀕していた。
しかも、それまでにほとんど時間の猶予はない。ヴァイスが攻めてきているのだ。

「現在の我々の領地はもといた極東の小さな島と、大陸にあるこの港町、あとはせいぜいその周りの街くらいだ。」

冥界地図中の右の方にちょろっと赤く領地が塗ってある。制覇率でいうと、多く見ても１％、おそらくゼロコンマの域だ。
これでも一応最初の領土は死守していて、港もちゃんと制圧してある。

とはいえ今までの戦闘での勝率はさらに低く、ほぼゼロとなっている。今まで何度となく戦闘をしてきたが、勝ったのは最初の三戦程度だ。
負けは続いていたが、港周辺はフォルテの奇策によって死守している。

「今回、敵の進行ルートはすでに予測できている。しかし、敵の数は我々の１０倍近い。」

フォールンは港の西の街、ポートゲートのさらに西にある渓谷を指し示しながらそう言った。

「正面からぶつかっても無駄なことは今までの経験から分かっている。」

周りの悪魔達がはぁとため息をつく。
それもそのはずだ。フォルテに「真正面からぶつかっても無駄」などと言われてしまってはもうどうしようもない。

「そこで、今回は正面から攻撃しない！　地形を利用して敵を一掃する！」

しかしため息をついた悪魔たちが今度は新しい作戦内容に興味を

示し、一気に辺りがざわつく。

フォルテはその反応を見ながらテーブルの上に木製の棒を数本置いた。

しかし、どうやらただの棒ではないようだ。数本のうちの一本は大きく反り曲がっており、その端と端を糸が繋いでいる。

「弓矢という武器だ。人間界で多く用いられている。これに少量の魔力を付与して致死性を高めて使う。」

「フォルテさん、少しいいか？　その武器は確かに強いかもしれない。しかし当たらなければ意味はないだろう？」

第3軍の長がそういうと、他の長達も「そうだよな。」などとざわつき始めた。

確かにその通りである。

どんな兵器を用いたとしても当たらなければどうということはない。

「だから地形を利用する。さっき言ったように、ポートゲートの入口は渓谷になっている。逃げ場はない。だから谷の上で待ち伏せて、ヴァイスが来たところでこの弓矢で死の雨を降らせるんだ。」

「魔法による攻撃はナシということか？」

「ああ。この弓矢という武器はそのままでも充分殺傷能力がある。」

しかし、殺す事ばかり考えないといけないとは。
世の中も悪くなったものである。しかしこの先悪くなるばかりだ。
この戦闘で勝っても負けても、ヴァーチャーはまだ戦わなければならないのだから。
フォルテは自分が持ってきた弓矢をにらみ、つぶれそうなほど強く握りしめた。

「今度こそ絶対勝つ。島からは1万人ほど兵士を借りたい。手配してくれるか？」

各隊の隊長たちはひそひそと話しだしていた。
彼らがフォルテに指揮を任せたのだが、もうフォルテへの信頼もそこまで高くないのだ。
誰から見ても間違いなく島一番、もしかしたら地獄一の天才であるフォルテであるが、これだけ負け戦が続けば天才というのも全く意味がなくなってきてしまう。
しかし他の者に任せたところでどちらにせよ勝機は見えないのだ。
彼らは何があってもフォルテに従うしかない。

「島からこれ以上兵士を引き出す事が可能ならばそうしよう。しか

し、島にまだ男が1万人も残っているかどうか……」
「ならできるだけ集めてくれ。ただし無理強いはするな。内乱などが起きてはいけないからな。」
「無理強いをせずにどうやって兵を集めると言うのか！　島の現在の総人口は4万。うち3万近くは女、子供、老人だ。集まるわけがない！」

今までの戦いですでに2万もの兵士が死んでいる。もう島には兵士となる悪魔がほとんど残っていないのだ。
しかし、ここで引き下がるわけにはいかない。

「ならボクが集める。ボクはもともと位も何もない平民だけど、いや、だからこそなんだってする。」

フォルテはそう言いながらテーブルを立ち去るのかと思ったが、彼は予想外の行動をとった。

「ボクに力を貸して下さい。ボク一人の力ではみんなを守りきれない。だから力を貸して下さい！」

そう言いながらみんなから見える位置で土下座をしたのだ。

「もう後には引けない。だからありったけの戦力が必要なんだ。」

各隊長はなるべく兵士を集めるようにする事を約束した。

～数日後～

「さあ！今日こそはヴァイス達に我らが正しい事を思い知らせてやろう！」

「ボクは非戦闘員なので砦にいるが、君たちは直接ヴァイスと打ちあうことになるはずだ。」

「先に言っておく。真正面から向かってもヴァイス相手では力負けする！無理に攻めようとするな。以上！」

その言葉と共にヴァーチャーがポートゲートへと行進を始めた。

1―1　作戦会議（後書き）

もうこういう頭使うのマジ無理だったｗｗ
なんでこんなので上げようと思ったんだろうｗ

→更新が遅れていたからである。

というわけで第一話始まりました。
第三話までが第一章です。
二章から女神が出てきます。

1―2　絶望（前書き）

感想よろです。

１―２　絶望

……港町から西に６０ｋｍ程離れた街、ポートゲート。

すでに開戦してから２４０時間以上の時間が過ぎている。
ヴァイスの総数は１０万近い、対するヴァーチャーはおそらく１万にも満たない程の少数。

開戦直後から、フォルテの奇策によってヴァイスも数を減らしているとは言え、その数はヴァーチャーの何倍もあった。
人間界から仕入れた弓矢という武器に少量の魔力を与えることによって魔力の消費を抑えているため、時間の割に消耗は少ないが矢の数は明らかに足りなくなってきていた。
矢の尽きた者は突撃する他なく、しかし強力な魔力を持つヴァイスを前にドンドン消されてしまう。

「フォルテ、このままでは…」
「分かってる！　今、最善のルートを探している！」

フォルテは指令本部の机に長い紙を敷き、頭をフル回転させなが

ら、フォルテ以外に読めないほどの達筆で文字を高速に書きなぐっていく。
研究をしている時からフォルテは考え事をする時、思考したことを全てメモしていたが、今回はフォルテも焦っているのが　文字通り目に見えて分かる。

「フォルテ、全軍の矢が尽きるぞ！」
「スカール、お前は突撃隊の隊長をしてくれ。ボクはここでまだ作戦を考える！　できるだけ時間を稼げ！」

明らかに焦った判断。しかし今はそうするしかない。

「分かった。遠距離からの攻撃には気をつけろよ。」

フォルテは答えることもなく思考を続けていたが、スカールはそれに構わず本部の結界から出た。

「時間を稼ぐ！　俺に続け！」

スカールは味方の中心で剣を掲げ、そう叫んだ。周りのヴァーチャー達もそれに答え、「うおおおお！！！」「わあああああ！！！」とそれぞれに声をあげた。
雄叫びが戦場を揺るがし、突撃の足音がさらにそれをかき消す。
そしてヴァイスとヴァーチャーの刃が交わり、戦場が一気に覇気に包まれた。

しかし状況は全く変わらず、相変わらず目の前の敵はほとんど数を減らしていない。

「フォルテ、早く俺達を導いてくれ…！」

フォルテの指示があるまでは、本当に消耗戦でしかない。
そして消耗戦では力も数もないこちらに分がないのは誰から見ても明らかだった。
ヴァイス達は地獄の王、ハデスの指示で単調に攻撃して来るだけだが、それでも貧弱なインテリジェントにとっては十分すぎるほど手強い。

スカールはヴァイスの吐く炎を盾に魔力を与えながら防ぐ。
しかしすぐに盾が焼かれ、スカールの身を焦がす。

かと思いきや、スカールは剣で炎を割って進み、悪魔の顔を切り刻む。
ヴァイスは顔を抑えながら倒れこみ、消える。

しかし、それを看取る余裕などなく、スカールは熱されて真っ赤になった剣を振り回す。
魔力＋熱で力を蓄えた剣で敵の身体をやすやすと斬り裂き、スカールだけがどんどんと敵の中へと入り込んでいく。
前から後ろからと攻撃を叩き込まれるが、スカールはたった一振りの剣でそれらを全て裁ききり、さらにその場にどんどんとヴァイスが積まれていく。

「はっ！」と短く、気合を入れた声と共に剣を振り、周りのヴァイスを吹き飛ばすと、スカールの元にようやく他のヴァーチャー達が追いついてきた。
しかしほとんどのヴァーチャーはすでに息を切らし、魔力もかなり限界に近いようだ。

「フォルテ、まだか……。」

スカールは自分の後ろにある結界を見ながらそう言った。
こちらは最初から1万弱の兵士しかいなかったのに、作戦もなし

に消耗戦を続けているのでは全滅してしまう。
現に今も戦える兵士はおそらく１０００人を下回っている。負傷兵を含めても２０００人にはならないだろう。

……これはもう間違いなく負け戦だ。

「スカール！！」

いきなり自分の名前を呼ばれて振り返ると、目の前を大きな斧が通過した。
いや、実際はスカールが反射的に避けたのだ。
しかし、名前を呼ばれなければそのヴァイスは自分を倒せたはずだ。

「スカール、久しぶりだな！」

ある程度の距離を取ってからそのヴァイスの顔を改めて見ると、そいつは自分が昔、アルマゲマキナが始まる前に剣術を教えていた頃の一番弟子、アインスだった。
アインスは牛の様な顔をした悪魔で体つきももともとスカールよ

りごつかったので、すぐにスカールと対等なまでに力をつけたのだ。
しかし彼はその容姿からも分かるように、インテリジェントではない。

「お前とは戦うことになるだろうと思っていた！」

スカールは斧に対抗するために剣に魔力を流し込み、その形を大きく、重くする。

「力を求めなかったお前は俺の前で死ぬ事しかできん！」
「俺は死ぬわけにはいかない！」

刃が重くぶつかりあい、衝撃が戦場中に広がる。
アインスの巨体がスカールを切り潰そうとしてさらに力をかけると、スカールの足元の地面が割れ始め、やがて沈み始める。
それでもスカールはなんとかアインスの斧を跳ね返し、さらに追撃をかけようとする。
しかしアインスはそれを軽々と跳ね返し、スカールは剣の重みで数メートル飛ばされた。

そして剣と斧が交差するたびスカールは力負けし、剣と共に押し切られる。
彼の一撃はそれほどに重かったのか？
いや、そうではないのだ。アインスが特別なのではなく、ヴァイスにとってはあの程度が普通なのだ。

だからヴァイスとまともに打ち合ってはいけない。
スカールもそれを分かっていて剣を重くしたのだが、逆にその重さに翻弄されてしまった。

「お前の力はそんなものだったか！スカール！！」
「ぐあっ！」

ついに剣を弾き飛ばされてしまい、勝負はスカールの負けだ。

「……ここで死ぬわけにはいかない！」

スカールはそういいながら指の先に魔力を集中し、弾を生み出す。
あとスカールにできる事はもう魔力弾を放つくらいのことだったのだ。

しかし魔力弾は、魔力の消費が激しい割に威力は低い。しょせん手品の様なものなのだ。

「そんな子供だましは通用せんぞ！」
「子供だましを使ってでも今は生き残らなければならない！」

やつは魔力弾を防ぐこともなく跳ね返すことができる。昔からそういうやつだと言う事は、彼に教えたスカールが一番熟知していた。

しかし、その自信が大きな隙を生むこともだ。
スカールは魔力弾を彼の顔に打ち込み、目の前で爆発させる。目くらましにしかならないがそれだけでも離脱するのには十分だ。
爆発させた直後、アインスの攻撃範囲から退避する。

「逃げるな！」
「今は死ぬわけにはいかないんだ！　この決着は次あった時にしよう！」

スカールはインテリジェント特有の素早さで本部結界の中に入り、フォルテの元へと急いだ。

「フォルテ、撤退だ！　これ以上はもたない！！」

フォルテはスカールが来たことに気づいて一回思考するのをやめた。

「……く。しかしここで引き下がれば港が……」
「諦めろ！！　ここも焼いて島へ戻ろう！」

それを聞いて、また思考を始めたのか、紙に向き直って文字を書いていく。
そんな時間はない。そう言おうとしたらその紙がこちらに渡された。

「分かった。一回島に戻って計画を立て直す。ポートゲートと港を焼くんだ。船も最低限の数でいい。」

そのはきはきとした声とは裏腹に、その顔は今にも泣き出してし

まいそうだった。

「フォルテ、お前はよく頑張ったよ。」

その肩に手をそっと置いてやる。しかしフォルテはこういう時は絶対に泣かないと言うことも知っていた。

「撤退信号を出せ。」

スカールはその言葉に従って指を真上に上げて赤色の魔力弾を大きな音ともに放つ。

「俺達の負けだ。」

１―２　絶望（後書き）

前回までのお話を読んでくれた方々に、天界、冥界、魂ｅｔｃの概念をしっかりしろと言われたので、ちょっと全ての話を読みなおしてみようかなと思っているこの頃ですｗ

今回のお話はどうでしたでしょうか？
フォルテは結局負けてしまいましたね。でも計画通りですｗ↑
次回はスカールが天界に行くお話です！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1508z/

革命戦記　アルマゲマキナ

2011年12月26日21時08分発行